

相模原障害者殺傷事件から1年



今日である痛ましい事件から1年になる。手帳に事件のことが記されていた。あとき事件を報じるニュースに半信半疑だった。多くの人が殺され傷つき、社会に大きな衝撃をあたえた。

写真は朝日新聞7月23日朝刊1面。津久井やまゆり園には事件後、犠牲者を悼み入居者や職員を励ます千羽鶴やぬいぐるみなどが全国から数多く寄せられた。「いたかったでしょう、苦しかったでしょう。守ってあげられず、ほんとうにごめんなさい」「明るい未来を目指していきましょう」などつつづられた手紙もあった

事件から1年が気になっていた時、毎日新聞23日1面の「余録」に目がとまった。

一 極微とは仏教用語で、それ以上分割できない物質の最小単位を指す。滋賀県の重症心身障害児施設「びわこ学園」で1960年代に製作された記録映画「夜明け前の子供たち」は最初、「進歩における極微の世界」という題名だった▲終戦直後、仲間と施設を創設した糸賀一雄氏は障害者福祉の父と呼ばれる。映画には、施設の療育者は子供の小さな進歩や変化を見逃さない目を養おうとの思いが込められていたという▲相模原市の障害者施設で入所者19人が命を奪われた事件から間もなく1年になる。「障害者なんかいなくなればいい」。加害者のゆがんだ思考を社会はどう受け止めてきたか▲月刊誌「世界」の4月号で自身も障害者の医師、熊谷晋一郎さんが語っている。現代社会はあす自分が必要とされなくなる不安を誰もが抱える。加害者に同調する人たちには自分の中にあるこうした感情にふたをするように、より弱い人を排除してしまう人がいるのではないかと▲そのうえで熊谷さんはこうも言う。障害の有無に関わらず、多くの人がそんな思いを抱えているからこそ「その不安を否定さえしなければ連帯できるようになると思う」▲障害児の「極微」を見つめ続けた糸賀氏は気づく。「この子らに世の光を」とあわれむ対象ではなく、彼らは自ら輝く力を持っていた。むしろ「この子らを世の光に」。事件後にこの言葉がインターネット上に拡散し、自らの価値観を問い直す人たちが増えた。そこに一筋の光を見る思いがする。

熊谷晋一郎さんの指摘は朝日新聞7月23日にも。「19人の仲間を失った私たちが、より良い社会をつくる責任を負っている」事件の原因を加害者や施設だけに求めるのは、「敵を見誤っている」という。健全者が自立しているように見えるのは依存できる制度や設備が多いからで、障害者の依存先は限られている。「依存こそが実は自立につながる」として、障害者の依存先を増やす社会づくりの重要性を説いた。

(2017年7月26日)